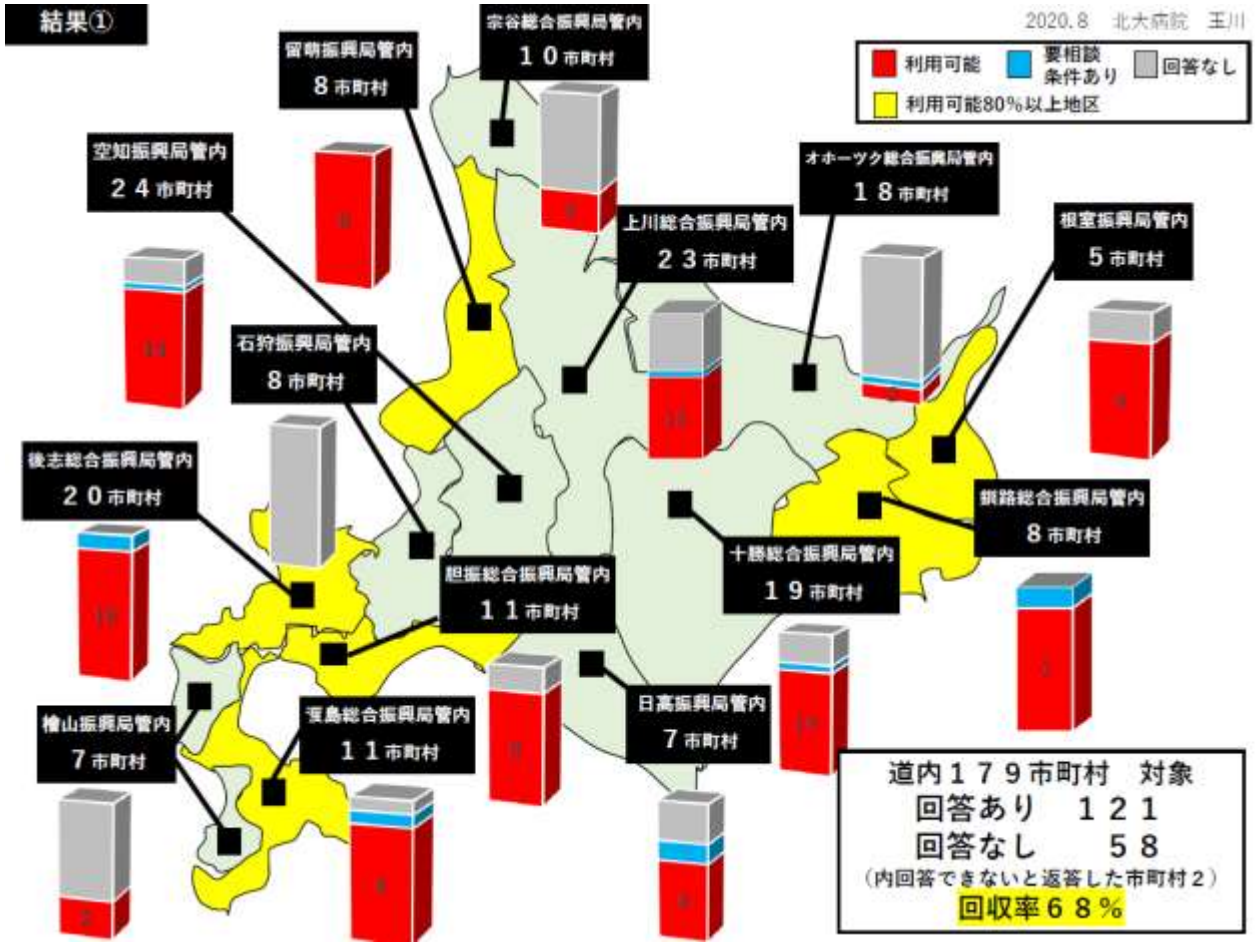
札幌での社会資源の少ない国家公務員における高次脳機能障害者の復職支援
～Ｂ型事業所が行った復職支援の1例～

○ 伊藤裕希（NPO法人コロポックルさっぽろ）
内田由貴子（脳損傷友の会コロポックル）
尾崎聖（相談室コロポックル）
土谷規子・比内啓之（クラブハウスコロポックル）

北海道の休職期間中における就労系福祉サービスの利用が可能かどうか調査(玉川)をしたところ、
利用可能の判断は各自治体で以下のような結果となっている。



休職中の高次脳機能障害者に対する就労移行支援サービス利用に関する全道調査報告書(2020.8)より
北海道大学病院リハビリテーション部　高次脳機能障害支援コーディネーター玉川侑那

1.はじめに

休職期間中の障害福祉サービスの利用可能と回答した自治体は北海道内全体の63%となっている。

結果②

2020.8　北大病院　玉川

□ 利用可能80%以上地区

管内	利用可能	要相談・条件あり		回答なし
空知総合振興局（２４市町村）	１９（７９%）	1（4%）	医師の意見書や認定調査等の資料を基に、障害支援区分認定審査会により審査後、利用が可能となった場合可能	4（１７%）
石狩振興局（８市町村）	／		機能障害にもよるが、受け入れする施設があるかどうかそのときにならなければわからない	8（１００%）
後志総合振興局（２０市町村）	１８（９０%）	2（１０%	当該事例の実績が最近ないため、上記の設問に回答することは困難ですが、実際はQ&Aの回答内容を原則として、個別案件の内容を確認した上で判断	
胆振総合振興局（１１市町村）	9（８２%）			2（１８%）
日高振興局（７市町村）	4（５７%）	1（１４%	対象者がいないため、判断できない。もし対象者が発生した場合に対応する	2（２９%）
渡島総合振興局（１１市町村）	9（８２%）	1（9%）	医師の診断書等で精神障害者であることが判断できる書類により可能とする	1（9%）
檜山振興局（７市町村）	2（２９%）			5（７１%）
上川総合振興局（２３市町村）	１３（５７%）	1（4%）	障がいの程度、家族支援、事業所の受入態勢等を総合的に判断する	9（３９%）
留萌振興局（８市町村）	8（１００%）		どちらともいえない。過去に高次脳機能障がいの休職者から、就労移行支援の利用について相談を受けた事例がなく、具体的な対応について検討できていない。医師の診断を受け、支援を受ける事が有効だと判断されている場合には、本人の状況を確認の上、利用可となるよう検討したいが、現時点で具体的な条件を示すことは難しい。	
宗谷総合振興局（１０市町村）	3（３０%）			7（７０%）
オホーツク総合振興局（１８市町村）	2（１１%）	1（6%）		１５（８３%）
十勝総合振興局（１９市町村）	１４（７４%）	1（5%）	町で該当になる事案が発生した場合は可能と判断する	4（２１%）
釧路総合振興局（８市町村）	7（８８%）	1（１２%	就労系障がい福祉サービスを実施することにより、より効果的かつ確実に復職に繋げられることの判断が必要になるため、企業の意見、医師の見解、利用する就労系サービス事業所の形態や状況などを全体的に確認してからの判断となると思われるため、一概に利用可能と回答することは難しい。	
根室振興局（５市町村）	4（８０%）			1（２０%）

結果

利用可能
１１２か所
（道内６３%）

要相談・条件有
9か所
（道内２０%）

休職中の高次脳機能障害者に対する就労移行支援サービス利用に関する全道調査報告書(2020.8)より
北海道大学病院リハビリテーション部　高次脳機能障害支援コーディネーター玉川侑那

厚生労働省から出された【平成29年度障害福祉サービス等報酬改定等に関するＱ＆Ａ】を受け、
札幌市では令和２年２月に就労系サービスに関する手引きを出しており、
要件を満たせば個別に休職期間中の障害福祉サービス（就労系サービス）の利用を認めている。

Ｑ　休職中に就労移行支援や就労継続支援Ａ・Ｂ型を利用することはできますか。

Ａ 復職支援については、原則、就労支援機関（例：障害者職業センター、ハローワーク等）や医療機関等の復職支援（例：リワーク支援）を利用することとされております。

ただし、就労支援機関や医療機関等の復職支援における対象者要件に該当しない等の理由により、復職支援を利用できない方については、次のいずれも満たす場合、個別に就労移行支援等の利用を認めております。

① 原則、事業所の調整によって企業及び主治医から提出された書面により、企業及び主治医が、事業所の提供する復職支援を受けることにより復職することが適当と判断していることが確認できること

② 就労移行支援等事業所の作成する、事業所の提供する復職支援の具体的な内容等が記載された書面により、当該復職支援を実施することで、より効果的かつ確実に復職につなげることが可能であると判断できること

また、障がいの状態が重く、復職することが困難な場合や今後復職しないことが明白な場合についても、個別に就労移行支援等の利用を認めております。

～就労系サービスに関する手引き～(2020.2)より
札幌市保健福祉局障がい福祉部障がい福祉課

2.事例概要

障害特性

- 記憶障害
  荷物の受け取りを忘れる
  家での約束をうっかり忘れる
  パソコンを使えていたが操作を覚えられない
  作業記憶保持の低下
  記銘力の低下
- 遂行機能障害
- 社会的行動障害
  易怒性：すぐカッとするようになった
  脱抑制：思った事を言うようになった
- 失書のない失語症
  頭ではわかっていても単語が出てこない
- 失読症
  漢字が難しく小学校低～中学年程度
- 視野狭窄
  右上1/4の視野狭窄
- 易疲労性

家の用事・約束事は重要ではないから覚えてられない。忘れても特に支障がないと思われている。
事務仕事が多かった為、パソコンはよく使用していたが、使い方を思い出せず、その都度確認をしている。

自分と意見が違ったときに否定的な言動がすぐ出てしまい、後悔してしまったり、イライラを顔に出してしまっていることは自覚されている。我慢が出来なくなった事も自覚しているが、気分の落ち込みにつながっている。

パソコンで文章を打つことは可能だが、誤字脱字が無いかチェックする事は困難で、頭で思い浮かんだ文章はスラスラと打つことは出来るがそれを音読する事が難しいとの事。

3.支援課程　業務の切り出しに関して

利用中期(平成X年+1年　10月～)

業務の切り出し

・当事者の出勤簿のデータ入力
・授産品の集計表作成、データ入力
・授産品の商品ラベル作成
・授産品のチラシ作成

配慮

・当事者へのプライバシーに注意し切り出しを行っている。
・特別扱いと思わせないように授産活動と分けて切り出した業務を提供する事で他者との関わりに配慮をした

本人の様子

・復職後をイメージしながら取り組んだ
・授産活動では受傷前の仕事と内容が離れていた為、とてもやりがいを感じた
・PCの操作方法など自分で試行錯誤して取り組んでいた

↓

復職や通所に対する本人の気持ちが大きく変化した。

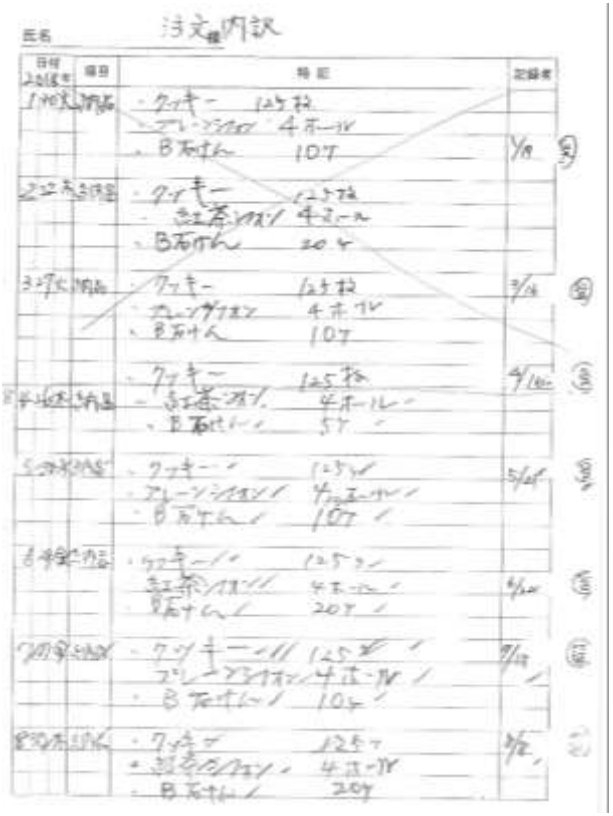
NIVR

3.支援課程　業務の切り出し（例）

利用中期(平成X年+1年　10月～)

・授産品の集計表作成、データ入力

手書きの内容を入力している。構成に関しては本人に任せている。
データ入力よりも表を作るのに時間が掛かっていた。(1年分入力に1時間程)
Excelの操作は何度か確認をされていた。



3.支援課程　利用経過とともに本人の変化した事

利用初期(平成X年+1年　5月～)

通所目的	作業・訓練内容	余暇時間	不安と感じる事
気分転換をする	軽作業 調理補助	集団(トランプ・ボードゲーム)	受傷後に出来なくなった事

→自身の障害特性を客観視していた為、振り返り面談の中では助言をせず傾聴を中心に行った。

利用中期(平成X年+1年　10月～)

通所目的	作業・訓練内容	余暇時間	不安と感じる事
復職か再就職をする	軽作業・調理補助 切り出した業務	個人(PCゲーム) 余暇プログラム:臨床美術	授産活動の内容 見通しが立たない事

→復職か再就職か見通しが立たず、不安定に過ごされている。授産活動の内容が本人と合わなかった為、事業所の業務の切り出しを行い、提供をした。
本人が復職をするか再就職をするか、離職をするか決心がついていなかった。

利用後期(平成X年+1年　12月～)

通所目的	作業・訓練内容	余暇時間	不安と感じる事
復職をする	軽作業・調理補助 切り出した業務	個人(PCゲーム) 余暇プログラム:臨床美術	授産活動の内容 見通しが立たない事 復職が出来るのか

→休職期間のうち、無給期間が発生する事から自身の生活設計を見つめ直し、復職することを中心に考える。
焦りから周囲の声が届かないこともあり、復職が出来るのか自身でも知ってもらう為、必要なプロセスとしてリハビリ出勤の提案を行う。

3.支援課程　本人に合わせて事業所が行った事

本人の変化

利用初期(平成X年+1年　5月～)

本人支援	連携
本人面談（自身の障害特性について） 余暇プログラムの提供：臨床美術	相談室

受傷後に出来なくなった事を考えたり、他者と関わる中で自身の障害特性を客観的に捉えることで気持ちの落ち込みが見られている。スタッフからの助言やアドバイスにより、さらに落ち込むことが予想されたため傾聴のみとした。

利用中期(平成X年+1年　10月～)

本人支援	連携
本人面談（今後どうしたらいいのか） 余暇プログラムの提供：臨床美術 臨床美術での評価 業務の切り出し	北海道労働局 障害者職業センター

事業所の活動に慣れてくると今後の見通しについて不安に感じられ、復職か離職して再就職かを悩まれている。漢字の読み書きに関して強く不安に感じられ自宅で訓練をしては通所した時に気分の落ち込みが見られている。普段と違う様子が見られる時は声掛けをし、不安に感じる事を吐き出す時間を設けた。

利用後期(平成X年+1年　12月～)

本人支援	連携
本人面談（復職に関する内容） 余暇プログラムの提供：臨床美術 復職面談同席（リハ出勤プログラム作成） 大学の講義（ゲストスピーカー）	復職先 家族会

本人からの相談が増え、目を赤くされるときもある。
相談内容は復職や再就職に関して話されたり、以前は〇〇が出来ていたのにと悔やまれている様子が見られている。一度振り返って自身を見つめ直し、気持ちを整理する事を目的に、外部講義にゲストスピーカーとして参加。自分の体験を伝えることで自身を客観的に見つめ直す機会になった。

リハ出勤　実施期間(平成X年+2年　2月～3月中旬)

本人支援	連携
復職先との連絡調整 本人と面談(来所・電話)	復職先

リハ出勤では事業所に通所するだけでは気が付かなかったことを新たに発見され、ただ悩むのではなく、どう工夫して復職するかなどポジティブに考えられるようになった。傾聴だけではなく、一緒に考える時間を設けた。

平成X年+2年　4月中旬より復職し、日々自身の障害と向き合いながら勤務されている。本人と情報共有したり、職場訪問をしながら定着のサポートを継続中。